

「初夢：イエスの出エジプト」

(マタイ2:13～23)

挽地茂男

2019.1.6 日本基督教団千歳丘教会礼拝



新年明けましておめでとうございます。といってもまだクリスマスツリーが飾ってあるのは、教会の暦ではまだ降誕節でクリスマスシーズンだからです。

ふつうクリスマスの飾

りは、1月6日の公現日にかたづけられます。1月6日は東方教会が3世紀まで祝っていたクリスマスの日なのです。その日を一つの区切りにしているわけです。ですから今日の聖書の箇所も、まだ主イエスの降誕と関係した箇所になっています。1月6日には伝統的には「東方の(三)博士たちの来訪」の物語を読むのが通例なのですが、今日はそれに続く箇所から一緒に学びたいと思います。

さて今日の物語は、父ヨセフと母マリアと幼子イエスの家族が、ベツレヘムを逃れてエジプトに下り、やがてそのエジプトを出て最終的にガリラヤのナザレに落ち着くまでの旅路を、旧約聖書との関連を大切にし



旧約のヨセフとその家族

ながら語る物語です。この物語を形作っている重要なテーマが5つあります。まずそのテーマを全部列挙します。物語を形作っているその重要なテーマとは、①夢のテーマ、②エジプトのテーマ、③預言と成就のテーマ、④モーセのテーマそして⑤二つの王国のテーマです。〔順番に①テーマについて、②のテーマについて、という説明をするのではなく、父ヨセフと母マリアと幼子イエスの家族の旅物語を追いながら、①が出てきて、④が出て、③がでたかと思えば⑤が出るような、順不同でテーマが出てまいりますので、皆さんの頭の



新約のヨセフとマリアと幼子イエス

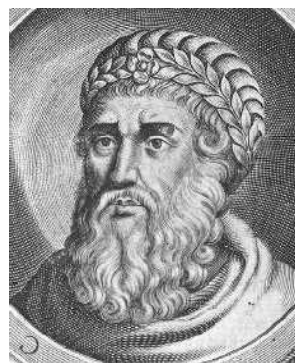
中で、それぞれのテーマについて確認をお願いしたいと思います。)つまり今日の物語には、旧約聖書に関連をもつ種々のテーマが織物の縦糸と横糸の様に織り込まれているのです。

少し物語り全体の見通しのようなものを立てておきたいと思います。主イエスの父ヨセフは旧約聖書のヨセフがモデルになっておりますから、旧約のヨセフ物語と同じように、夢(①)が出来事を先導していきます。そして夢(①)で与えられた天使のお告げに従って、ヨセフとマリアと生まれたばかりの幼子イエスが向かった場所はエジプトでした。しかしやがて聖家族は、やはり夢(①)のお告げに従って、そのエジプトを出立いたします。つまり幼子イエスのエジプト下りと出エジプトの物語は、旧約聖書のエジプトのテーマ(②)、イスラエルの民のエジプト下りと出エジプトの出来事と、二重のイメージ



で描かれているのです。そしてこの出エジプトの出来事と関係して、モーセのテーマ(④)が重要な役割を果たします。加えて物語られるこれらのすべての出来事が、旧約聖書の預言の成就(③)として語られるのです。

さてヨセフとマリアと幼子イエスの旅物語をたどりましょう。東方の占星術の学者たちは、主イエスが誕生した場所〔ルカ：馬小屋〕を訪れ、黄金、乳香、没薬を献げて、「新しい王」として生まれたばかりの「ダビデの子」主イエスを礼拝します。その後、彼らもまた夢(①)で「ヘロデのところへ帰るな」とお告げを受けて、ヘロデに何も告げずに、別の道を通して自分たちの国へ帰ってしまいます(2:12)。



ヘロデ大王

そしてここからが今日の聖書箇所。13節。

2:13 占星術の学者たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとして

いる。」

つまり誕生物語は、イエスの誕生と同時に、すでに、人々のイエスに対する**拒絶と受容**の物語を配置しているのです。つまりユダヤ人指導者層(ヘロデ)による主イエスの拒絶と、東方の占星術の学者たちのような異邦人によるイエスの受容という、つまり拒絶と受容という主イエスに対する人々の態度のあり方を、主イエスの生涯の始まりに物語の形で要約し、マタイによる福音書全体のテーマを予め示す型つまり「予型」として提示しているのです。ここに示されているのがこの物語のもう一つの大きな(5番目の)テーマ、つまり二つの王国のテーマ(⑤)なのです。二つの王国——それはここではヘロデ王に見られるようなこの世に属するサタンの王国と、「ダビデの子」イエスを新しい王とするメシアの王国——は最初から互いに相容れず、その衝突は物語が進むに従って少しずつ顕著になり、このテーマがマタイ福音書全体のテーマであることが明らかになってまいります。

主イエスの誕生は、二つの王国の衝突の始まりでもありました。主イエスの誕生によって始まる新しい王国は、この世にすでに存在

した王国に圧倒されています。まったく無力です。この世を支配する王権は、神の民をも翻弄します。時代を支配する大きな力によって、主イエスの家族、父ヨセフと母マリアと幼子イエスはその生誕の地(ユダヤの)ベツレヘムから、エジプトへと、逃亡する被征服民のように移動を余儀なくされたのです。しかしそのようなわたしたちの力ではどうしようもない力が支配している世界で、神の出来事が少しずつ確実に進展していくことを、マタイの物語は示します。

続けて14－15節。

2:14 ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り、2:15 ヘロデが死ぬまでそこにいた。それは、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

父ヨセフは一家を連れてエジプト





に下り(②)ます。旧約聖書のヨセフのように夢(①)でお告げを受けたからです。『ドラキュラ』(1897年)という恐怖小説を書き上げたブラム・ストーカーは、カニを食べ過ぎて悪夢を見て、これを元にこの小説を書いたと語っていますが、現代では、夢は、日常経験(カニの食べ過ぎ)の反映として捉えたり、比喩的に、現実の自分の力量をこえる目標をドリームとして夢について語ったりする程度で、いずれにしろ、あまり大きな意味をもちません。しかし、聖書の世界では、夢は大きな意味をもちます。それは、夢が神との繋がりをもっているからです。使徒言行録では、旧約のヨエル書を引用してこう語っています。使徒言行録2章17節。

2:17 『神は言われる。終わりの時に、／わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、／若者は幻を見、

老人は夢を見る。

教会とは、夢や幻と見通し(つまりヴィジョン)が生きている所なのです。しかもそれは牧師一人のものではなく、信徒の夢や幻と見通し(ヴィジョン)が生きている所なのです。

さて主イエスの誕生物語では、旧約聖書に見られる「ヨセフの夢」に並行する夢のテーマ(①)が重要な働きをしています。もう一つ、すでに指摘しましたように、モーセのテーマ(④)が絡んできます。実はマタイによる福音書全体としては、この「モーセのテーマ」の方が――二つの王国のテーマと共に――次第に重要になっていきます。そのため、マタイによる福音書を研究する学者たちは、マタイが描くイエス・キリストを「新しいモーセ」と呼ぶことがあります。



福音書を書いたマタイが属していた教会は、ユダヤ人キリスト教徒を中心として、異邦人信者(キリスト教徒)を加えた混成教会と

考えられています。そこでは、旧約聖書のモーセ律法をどう受け入れたらよいのか、どう捉えたらよいのか、異邦人も含めて（旧約聖書の律法に）書いてあることを全部行う必要があるのか、といったことが重要な問題となっていたのです。皆さんもご存じでしょう。マタイによる福音書の5章からはじまる「山上の説教」で主イエスは、モーセがシナイ山に登って十戒を神様から受け取ったように、同じように山上に登り、弟子たちの前に腰を下ろして、旧約聖書の律法をとりあげてこう言います。あなたがたは、「隣人を愛し、敵を憎めと命じられている」（レビ記19:18）。モーセの律法の文言です。そしてこれを、主イエスは、聖書の根本精神である「愛」の精神から読み替えていくのです。「5:44 しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」（マタ5:44）。このようなモーセ律法の根本的な読み替えのパ



ターンが6つ連続的に続きます(5:21-48)。このようにそれぞれの福音書には、それぞれに大切なテーマがあります。それはわたしたち一人一人に人生の重要なテーマや問題があるのと同じです。一人一人の個性が違い、人生経験が違い、個人史が違い、問題や課題が違うのと同じなのです。聖書の記述は、光が一つであっても、プリズム（分光器）を通すと、七色の光に分かれるように、福音が、聖書を書いた人々の、生きている状況や、個性や、課題を通過すると色合いが違ってくるのです。福音書を読み比べればすぐに分かります。福音は一つでありながら、人生の数ほど色合いをもっているのです。イエス・キリストを信じる信仰は、信じる者それぞれの「わたしのイエス」を核にして支えられているのです。それなしには生きた信仰はあり得ないでしょう。「わたしのイエス」であり、同時に「わたしたちのイエス」なのです。新約聖書は「神と人間の書」です。キリストを信じ、神を信じて、抜き差しならない生を生きた人々の証しの書でもあるのです。

マタイが属していた教会は、ユ



奴隷として辛酸をなめながらも、ついにエジプトの宰相となる旧約のヨセフ

ダヤ戦争（66-70A.D.）の際に、パレスチナからシリアに逃れた教会であるということが、マタイ研究では、ほぼ確実視されています。ですから、ヨセフの一家がエジプトに避難する物語も、マタイによる福音書の最初の読者にとって他人事の話ではなかったのです。危険の中で神の導きをたよりに前進していくヨセフと聖家族は、キリスト教の草創期を生きた人々にとって、勇気の源だった可能性があります。

権力者の欲望や気まぐれに翻弄されながらも、ヨセフと聖家族を通して、神の御心、預言が成就(③)していった、と聖書は語ります。15節に引用されているのは、ホセア書11章1節、マタイ福音書に出てくるの第2番目の定式引用〔主イエスの生涯を旧約聖書で証明するための引用〕です。ホセア11章1節はこうなっています。

11:1 まだ幼かったイスラエルをわたしは愛した。エジプトから彼を呼び出し、わが子〔神の子〕とした。

神は——旧約聖書では——エジプトの苦しみからイスラエル(の民)を解放して、彼らを「神の子」として恵みを注ぐと約束します。幼かった主イエスも同じく、エジプトの苦難を通して〈神の子〉と呼ばれる日を待つのです。

この世の王であるヘロデは、東方からやって来た占星術の学者たちから「もう一人の王」の誕生を知らされたときから、自分の王権を揺るがすこの「もう一人の王」の出現に関する占星術の学者たちの報告が一向にもたらされないことに苛立っていました。ついに彼らにだまされたと確信すると、祭司長や律法学者たちを動員して、幼子イエスの生まれた場所を突き止め、安全策をとり二歳以下の子どもたちを皆殺しにするように命じます。16-18節

2:16 さて、ヘロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺

一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。2:17 こうして、預言者エレミヤを通して言われていたことが実現した。2:18 「ラマで声が聞こえた。激しく嘆き悲しむ声だ。ラケルは子供たちのことで泣き、／慰めてもらおうともしない、／子供たちがもういないから。」

ここでも預言の成就(③)が語られます。ヘロデによる幼児大虐殺(16節)、ヘロデによる罪のない子供たちの大虐殺は、事件の性格から言って、歴史上のヘロデ大王と合致します。ヘロデは権力を掌握し続けることに非情な人間でありました。彼は自分がユダヤ人ではなかったために(イドマヤ人)、力を失ってローマ帝国の傀儡王朝となっていたユダヤ人最後の(ハスモン)王朝から王妃を迎え、イスラエルの正当な王権の継承者であると宣言します。そして、時間をかけて自分の治世を盤石に固めた後は、その妻もその妻が産んだ息子たちも、謀反の火種にならないように殺害してしまいます。しかしヘロデの数多くの残虐行為の詳細な記録の中には、このような幼児大虐殺の記録は存在していま

せん。むしろこの物語の重要性は、マタイに特徴的なモーセのテーマ(①)と関連しているということなのです。モーセの時代、イスラエルの民は、エジプトで重い苦役に喘いでいました。しかもイスラエル人は、苦しめられても苦しめられても、その数が増えていくので、脅威に感じたエジプト



王ファラオは、イスラエルの男児(男の子)が生まれたら、すぐに殺してしまうように命じます。モーセはその危険をかいくぐるようにして、救われ、おまけにエジプトの王妃に拾われて王宮で育てられます。しかしついに自分の出自、自分がイスラエル人であることを知り、紆余曲折の末、イスラエルの民の解放のためにエジプト王ファラオと対決し、出エジプトを成



し遂げます。マタイの物語では、ヘロデにファラオの役割が与えられています（出1:22-2:10参照）。この残酷な物語の是非については、マタイは、何も語っていません。マタイの注意は、この出来事を預言の成就(③)として見るという点に集中しています。成就したのはエレミヤの預言でした(17-18節)。これはマタイの第3番目の定式引用です。エレミヤ書31章15節です。旧約本文。

エレ 31:15 主はこう言われる。
ラマで声が聞こえる／苦悩に満ちて嘆き、泣く声が。ラケルが息子たちのゆえに泣いている。彼女は慰めを拒む／息子たちはもういないのだから。

泣いているラケルとは、イスラエル十二族長のベニヤミンと(ヨセフの子の)エフライムの部族の家母長とされるラケルで、子供たち、すなわちイスラエル人のためにラマで泣いている図が描かれます。ラマはエルサレムの北五マイルに位置し、伝承のよればそこにラケルの墓があり、バビロン王ネブカドレツァルの軍隊が捕囚の民を移送するために、捕囚民にを集合させた場所なのです（エレ40:1）。

そこは民族の悲しみの場所なのです。幼子イエスの物語は、イスラエルの経験を集約し、主イエスの物語として反復しているのです。

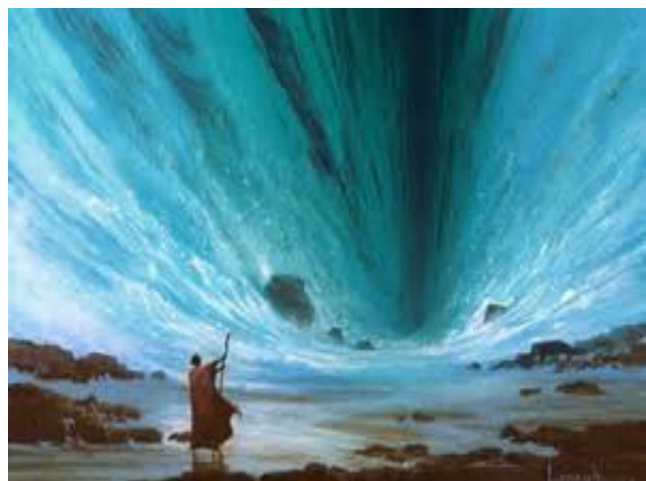
しかしヨセフとマリアと幼子イエスの家族がエジプトに下ってしばらくすると、ヘロデの脅威が去ります。ヘロデ大王が亡くなったのです。いよいよ幼子イエスの出エジプト(②)です。ここでも夢(①)を媒介として、神が遣わした天使の指示が与えられます。天使は、イスラエルに戻るようにヨセフに告げます。19－21節。

2:19 「ヘロデが死ぬと、主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて」2:20 言った。「起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。」2:21そこで、ヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、



イスラエルの地へ帰って来た。

今度はエジプトを脱出したモーセのように、出エジプト(②)を敢行します。主イエス自身の経験は、イスラエルの民に対する神の約束の成就として描写されています。〈イスラエル〉の民は、エジプトへ下り(②)、そしてモーセに導かれてエジプトを脱出し(②)、紅海(葦の海)をわたり、荒野での40年間の試練を受けました。一方〈イエス・キリスト〉も、エジプトに下り、そしてエジプトを脱出し、洗礼の水をくぐって、荒野で40日40夜サタンの試練を受けました。そして彼は、人々を救いに導く救い主(神の子)となりました。モーセは旧約聖書のイスラエルの民を、荒野での40年間の試練の後、約束の地(カナン／パレスチナ)の目前にまで導きます。しかし約束の地に導いたのは、モ



ーセではなく、ヨシュアというモーセの後継者でした。この〈ヨシュア〉というヘブライ語の名前をギリシア語に直すと〈イエスース〉(イエス)となります。

ヨセフとマリアと幼子イエスの家族は、エジプトからついにイスラエルへと帰ってきました。

2:22 しかし(です。22-23節)、アルケラオが父ヘロデの跡を継いでユダヤを支配していると聞き、そこに行くことを恐れた。ところが、夢でお告げがあったので、ガリラヤ地方に引きこもり、2:23 ナザレという町に行って住んだ。「彼はナザレの人と呼ばれる」と、預言者たちを通して言われていたことが実現するためであった。

しかし戻ってきたイスラエルの地はヘロデ大王の息子アルケラオスが統治しており、身の危険を感じているところに、再び夢(①)でお告げを受けて、ガリラヤのナザレへと、移動します。

こうしてガリラヤのナザレに定住する身となります。マリアとヨセフと幼子イエスはベツレヘムから、エジプトを経て、ガリラヤへと神に導かれて、ついにナザレの人となりました。そしてこのこと

もまた、『彼はナザレの人と呼ばれる』と、預言者たちを通して言われていたことが実現するためであった」とされます。しかしここに登場する第4番目の定式引用は、ヘブライ語本文（MT）にも七十人訳ギリシア語旧約聖書にも見出せません。マタイの念頭には、おそらくイザヤ11章1-16節があったと思われます。その1-2節。

イザ 11:1 エッサイの株からひとつの芽が萌えいで／その根からひとつの若^{ネーツェル}枝が育ち 11:2 その上に主の霊がとどまる。知恵と識別の霊／思慮と勇気の霊／主を知り、畏れ敬う霊。

そこでは、約束のメシア的王は、ダビデの家系から生じる「若枝」と呼ばれます。「若枝」を意味する צֶמַח（ネーツェル）という単語は、「ナザレ」に近い響きを持っていますし、「若枝」はメシアを表す言葉として解釈されてきました。救いの若枝が、救いの〈ネーツェル〉が、ナザレでその成長を待っていたのです。

権力者の欲望や気まぐれ、また時代の変化に翻弄されながらも、神の御心は成就してまいりました。

また同時に、神の御心が成就していくプロセスは平坦な道ではなく、危険さえ伴うことが理解できます。主イエスの生涯の始まりには、さまざまな危険が満ちていました。しかしそれらの危険が、神によって乗り越えられていったように、教会もふりかかるさまざまな危険を、神に導かれるとき乗り越えていくのです。信仰の盾と救いの兜と御言葉の剣が教会に許された武器です（エフェ6:16-17）。神がわたしたちの信仰と祈りを豊かにしてくださいますように。しかしながら、そのとき、ヨセフが示す—この物語の中でも彼は一言も発せず黙々と導きに從っていく—ような従順こそが、わたしたちの行動の中心となりますように、祈りましょう。

2019.1.6 日本基督教団千歳丘教会礼拝

父ヨセフと幼子イエス

- 10 -

2:13 占星術の学者たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」

2:14 ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り、

2:15 ヘロデが死ぬまでそこにいた。それは、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

2:16 さて、ヘロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。

2:17 こうして、預言者エレミヤを通して言われていたことが実現した。

2:18 「ラマで声が聞こえた。激しく嘆き悲しむ声だ。ラケルは子

供たちのことで泣き、／慰めてもらおうともしない、／子供たちがもういないから。」

2:19 ヘロデが死ぬと、主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて、

2:20 言った。「起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。」

2:21 そこで、ヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ帰って来た。

2:22 しかし、アルケラオが父ヘロデの跡を継いでユダヤを支配していると聞き、そこに行くことを恐れた。ところが、夢でお告げがあったので、ガリラヤ地方に引きこもり、

2:23 ナザレという町に行って住んだ。「彼はナザレの人と呼ばれる」と、預言者たちを通して言われていたことが実現するためであった。

2·13 Ἀναχωρησάντων δὲ αὐτῶν ἰδοὺ ἄγγελος κυρίου φαίνεται κατ' ὄναρ τῷ Ἰωσήφ λέγων, Ἐγερθεὶς παράλαβε τὸ παιδίον καὶ τὴν μητέρα αὐτοῦ καὶ φεῦγε εἰς Αἴγυπτον καὶ ἵσθι ἐκεῖ ἕως ἂν εἶπω σοι· μέλλει γὰρ Ἡρώδης ζητεῖν τὸ παιδίον τοῦ ἀπολέσαι αὐτό.

2·14 ὁ δὲ ἐγερθεὶς παρέλαβεν τὸ παιδίον καὶ τὴν μητέρα αὐτοῦ νυκτὸς καὶ ἀνεχώρησεν εἰς Αἴγυπτον,

2·15 καὶ ἦν ἐκεῖ ἕως τῆς τελευτῆς Ἡρώδου· ἵνα πληρωθῇ τὸ ῥηθὲν ὑπὸ κυρίου διὰ τοῦ προφήτου λέγοντος, Ἐξ Αἰγύπτου ἐκάλεσα τὸν υἱόν μου.

2·16 Τότε Ἡρώδης ἰδὼν ὅτι ἐνεπαίχθη ὑπὸ τῶν μάγων ἐθυμώθη λίαν, καὶ ἀποστείλας ἀνείλεν πάντας τοὺς παῖδας τοὺς ἐν Βηθλέεμ καὶ ἐν πᾶσι τοῖς ὁρίοις αὐτῆς ἀπὸ διετοῦς καὶ κατωτέρω, κατὰ τὸν χρόνον ὃν ἠκρίβωσεν παρὰ τῶν μάγων.

2·17 τότε ἐπληρώθη τὸ ῥηθὲν διὰ Ἱερεμίου τοῦ προφήτου λέγοντος,

2·18 Φωνὴ ἐν Ῥαμὰ ἠκούσθη, κλαυθμὸς καὶ ὀδυρμὸς πολὺς· Ῥαχὴλ κλαίουσα τὰ τέκνα αὐτῆς, καὶ οὐκ ἤθελεν παρακληθῆναι, ὅτι οὐκ εἰσὶν.

2·19 Τελευτήσαντος δὲ τοῦ Ἡρώδου ἰδοὺ ἄγγελος κυρίου φαίνεται κατ' ὄναρ τῷ Ἰωσήφ ἐν Αἰγύπτῳ

2·20 λέγων, Ἐγερθεὶς παράλαβε τὸ παιδίον καὶ τὴν μητέρα αὐτοῦ καὶ πορεύου εἰς γῆν Ἰσραὴλ· τεθνήκασιν γὰρ οἱ ζητοῦντες τὴν ψυχὴν τοῦ παιδίου.

2·21 ὁ δὲ ἐγερθεὶς παρέλαβεν τὸ παιδίον καὶ τὴν μητέρα αὐτοῦ καὶ εἰσῆλθεν εἰς γῆν Ἰσραὴλ.

2·22 ἀκούσας δὲ ὅτι Ἀρχέλαος βασιλεύει τῆς Ἰουδαίας ἀντὶ τοῦ πατρὸς αὐτοῦ Ἡρώδου ἐφοβήθη ἐκεῖ ἀπελθεῖν· χρηματισθεὶς δὲ κατ' ὄναρ ἀνεχώρησεν εἰς τὰ μέρη τῆς Γαλιλαίας,

2·23 καὶ ἐλθὼν κατώκησεν εἰς πόλιν λεγομένην Ναζαρέτ· ὅπως πληρωθῇ τὸ ῥηθὲν διὰ τῶν προφητῶν ὅτι Ναζωραῖος κληθήσεται.